

ふじ女 令和5年3月度特別作品

スキーに行く  
ふじ女

スキーは、好きで行くのに、いざ行くとなると面倒になるものだ。ウエアを、雨具やら登山用品やらを、いろいろを引き出しから引、振り出す。早起き、運転、忘れ物。山道も長い。ぶつくさ言うが、到着すると楽しい。雪景色が良い。走っていても速い。ご飯が美味しい。ドライブがてら、帰りは違う道を通ら、ダムに落ちそうを道だつた。ふとしたことで簡単に違うところに行けてしまうので、やはりフラフラとスキーに行ってしまうのだろうか。

スキー行く準備の朝の眠気かな

地上から消失雪の後続車

ペンギンも人間もいるスキー場

雪眼鏡身内他人も知人かな

休憩のチョコは、パキンと息白し

手袋で小突くりフトを待つ男子

膝裏に冷たきリフト振動す

足下を行き交う小人スキーヤー

結界やリフト降り場の冬木立

ストックに手袋干して歓談す

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

楽しい特別作品である。

スキーに行く朝の面倒な支度から始まり、ドライブ、ゲレンデの面白さ、不思議さ、そして、と読み手にしっかりと伝わってくる。やはりスキーは楽しい、と読み手にしっかりと伝わってくる。私も久し振りに思いっきりスキーをしたくなった。

ペンギンも人間もいるスキー場

旭山動物園がスキー場になったらこうなる。

そうだとするとどきどき楽しいが、ペンギンのような着ぐるみを着て、子どもが遊んでいるのだ、きつと。

雪眼鏡身内他人も知人かな

こけたと言ひ、疲れたと言ひ、笑っている。笑顔にサングラスをすると、みな同じような美男美女に見えるから不思議だ。

手袋で小突くりフトを待つ男子

一つの世も、男子はじゃれあってばかりなのだ。

足下を行き交う小人スキーヤー

リフトから下を見ると、おや、木々の間にコロポックルが滑っているではないか。

結界やリフト降り場の冬木立

リフトを降りて木立で向きを変えると、そこからはこぶだらけの急斜面。滑るぞ！

黒部、信濃路の旅 松田裕子

五年前の十一月初旬、夫と「黒部アルペンルートと上高地、白川郷の旅」のツアーに参加しました。紅葉には遅すぎたと思いましたが、宇奈月駅から樺平までのトロツコ列車から見た黒部川の透き通った緑の水と紅葉のコントラストが素晴らしい、今でも目に焼きついてます。ケーブルカー、トロリーバスと乗り継ぎ、立山の室堂に着いた時は、一面の雪景色と真の青空、それに、ナナカマドの赤い実、すべてに感動しました。楽しかった七日間のツアーでした。

冬の郷手にあたたかき五平餅

しばらくは林檎畑や立山線

室堂は眩しいほどの深雪晴

時雨るるやかすかに望む能登半島

寒暁の流れ激しき黒部川

北吹いて棒に巻き付くツアー旗

信濃路をそぞろに歩く冬帽子

七竈一粒づつに日の差して

露天湯に首まで沈み冬灯

冬の駅ちりぢりに去る旅仲間

《作品鑑賞》  
真青な空、ダム湖の青、伸びきった枝に七竈の赤、澄み切った空気の中、素敵な旅をされたのだと思います。しかも、俳句は平明な文体で即物具象、対象をしっかりと写生されており、楽しく読ませて頂きました。私も二度ばかり旅行したことがあるので、その当時を思い起こし、たいへん親しみを感ずりました。  
あごみ

冬の郷手にあたたかき五平餅  
かの地の郷土料理でタレがおいしい。地方性があり幸福感があり、食べ物の匂を美味しく詠んでおられます。

時雨るるやかすかに望む能登半島  
バスか汽車の窓から眺めておられるのか、海岸線は長く、日本海の波の荒さや外の寒さも感じ、景を切り取る目のつけどころに余情を感じました。

北吹いて棒に巻き付くツアー旗  
誰もが経験している事柄を新鮮な切り口と平明な言葉で綴られており、お上手だと感心しました。

信濃路をそぞろに歩く冬帽子  
お揃いの冬帽子でしょうか。「に」の助詞で、微笑ましく仲の良いご夫婦の様子が見えられました。

七竈、露天湯の句も表現が豊かです。そして、最後の句は、締めくくりにシンプルにご自分を表現しておられ、調べよく詠みあげておられました。楽しかった旅の様子に、私ももう一度行きたいと誘われました。